

ブラック・ブレード 黒の刃

豆は畑のお肉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブラック・ブレットを視聴ないし読破した人の中には、こんなイニシエーターがいたことを覚えているのではないだろうか。可愛い幼女キター！と息巻いていたら序盤で退場してしまった千寿夏世のことを。

では、皆さんは覚えているだろうか。そんな彼女の相棒、伊熊将監というプロモーターを……

この物語は、ある日突然伊熊将監に成り代わっていた男がなんやかんや奮闘するお話です。

# 目次

## 序章

ボディーパーカッション	1
不審者と幼女	5
君の名は	8
ココハ、ドコ？ボクハ、テンプレ。	12
幕間①	21

## 序章

### ボディーパーカッション

とある部屋の一室に、穏やかな日の光が閉めたカーテンの隙間から差し込む。日の光はそのまま伸びていき、部屋のベットに仰向けになりながら、惰眠を貪る男の顔を優しく照らす。男はしばらく眠り続けていたが、次第に顔に当てられた明るさに意識がいき、脳が起きだしていく。次いで脂肪の殆ど残っていない精悍な肉体が徐々に活性化していき、身体が活動する感覚を感じ取り男はゆつくりと瞼を持ち上げた。

いつもと何も代わり映えのしない朝。小野将馬《おのしょうま》はその代わり映えのしないはずの朝に奇妙な違和感を感じた。

まず目覚めがいい。これ自体は何も憂うことはないのだが、目覚めが良すぎるのだ。身体がやたらと活気に満ちている気がする。まるで一流のアスリートや格闘家の様な肉体の張りや密度を、自分の標準的なモブ体型から感じる。

次に自分の部屋のはずなのにえらく落ち着かない。昨日、自分の部屋で床につくまでの記憶ははつきりとあるし、ここは自室で間違いなはずなのだが……なにか、こう、なんとも言えない馴染み深い部屋の空気が感じられない。部屋の内装の違いを見つけようにも、元々の部屋は寝るだけの部屋だからベット以外の物は置いていない。つまり部屋の比較のしようもないのだ。

（なんだ？この違和感の塊は。俺が寝てる間に誰かが俺を誘拐した？いや、ドラマやアニメじゃあるまいし。それに玄関や窓の鍵はかけてあるし、一人暮らしで金の無い俺を攫う物好きもいないはずだ。……うーん、わからん。）

朝っぱらからうんうんと頭を捻って悶々としていたが、やがて考えるのは止めた。

（常識的に考えて、寝て起きたら全く違う部屋にいるなんてあるわけ

ないし、ましてや俺を攫う物好きなんてさらさない。寝起きだからなんとなくそう感じただけだろう。)

そう結論づけて将馬はベットを抜け、部屋を出て顔を洗いに、洗面所へと向かう。幸か不幸か部屋の間取りが似通っていた為に、将馬は特に疑問を抱くことなく廊下を歩いていく。

「……………」そうして洗面所に辿り着き、鏡に映る自分の顔を見たとき、将馬は自分が感じていた違和感の正体を知ることとなった…。

鏡の前には、髪を金髪に染めたツンツン頭に、表情筋が睨む仕草で固定されたかの様な目つき。どう好意的に見ても「路地裏でギャングやってんだ。恫喝の天才だ！大統領でもブン殴ってみせらあ、でも警察だけはかんべんな！」と言わんばかりの人相の悪く、肉襦袢を数枚重ね着したかの様な筋肉モリモリマッチョマンの変態が、鏡から将馬を見つめていた。

よく視ると変態の発達した左腕には、K I L L or D I Eの文字を抱いた死神の様な髑髏の刺青が彫られている。

将馬は一途の望みに賭け、後ろにこの男が立っていると思いとつさに振り返った。が、そこには当然誰もいない。

(そりゃ、そうだ。鏡に映ってるの、この男だけだし。)

将馬は振り返った頭を戻し、改めて鏡に映る筋肉マンをじつと見据える。

(……………)知らない顔だ。顔見知りどころか多分会ったこともない…。こんな目立つ奴が視界に入れば絶対に記憶に残る。つてことはなにか？俺は寝てる間に全く見ず知らずの男に成り代わったのか？似た様な現象が起こる映画が流行っているし、いつの間にか俺もそのブームに乗ったのだろうか。まあ、その映画は美少女に成り代わってたけど…。)

暫しの沈黙の後将馬はH A H A H A H Aとアメリカンな笑い

声をあげる。自分の声よりもイケメンだったことに密かにダメージを負いながら、

「いやいやいやいや。ないないない。成り代わりとかファンタジーかよって！そんなメルヘンチックな現象を考える程、俺の脳内はお花で満たされちゃいないっての。アレだ！多分どこかの悪の科学者みたいのが肉体改造でもしてくれただろ、うん。いやあ最近運動不足だったし!?顔もまあ悪人面とはいえ、イケメンにしてくれたみたいだし!?いやはや、氣い遣わせちゃったなあ悪の科学者に！H A H A H A、ちゃんと後でお礼言わなきゃな！」

などと、どうにか今、自分に起きている現象を自分の脳が処理できる様に肉付けしていく。

「ふう。原因さえわかりやどうつてことないな。普通TVとかだと、こういう場面は動揺してあたふたするもんだが意外と冷静だな、俺。やっぱり男は熱血系より、やれやれクール系だな！」

熱血系単細胞タフガイのなりをした自称クール系男児の将馬は、己の出した結論が既に十分冷静さを欠いた判断であることに気づかない。

疑問を解決した(棚に上げた)将馬は、部屋を見渡そうとする程度には落ち着きを取り戻す。

そして再び思考が混乱の渦に飲み込まれた。

(洗面所の位置も、鏡が設置されている場所も同じだからわからなかったけど……なんか所々内装が違う!??)

自分の慣れ親しんだ部屋でない、似た様な別の部屋に居ることに将馬は極限まで焦る。焦り過ぎて逆に普段通りの行動をしようと脳が働き、洗面所でとりあえず顔を洗い始める。

両手で桶を作り、そこに水を溜めて顔に打ちつける。若干いつもより打ちつける威力が高いのだが、そんなこと御構い無しに黙々と顔面に水を強打していく。

バシャ！バシャア!!バツシャアアン!!!ババシャア!!!ババアシャア

アアアン!!!!

顔に水を打ちつける音は段々激しくなり、勢い余って水の大半は顔の横を通り抜け床に着水していく。水が無いのに顔から快音が聞こえてくるのは、水の無くなった将馬の手が自身の顔をしばいているからだ。

傍から見れば、水で手を清め、その清めた手で己の顔をしばき倒している不審者にしか見えないだろう。

肉と肉がぶつかり合う音と、床に水が撒かれていく音が、陽気な光で大地を照らす清々しい朝の風景を彩っていく。

そんな非日常の演出を一手に担っている不審者を、困惑しながらもドアの隙間からそつと覗き「将監、さん……？」と呟く小さな影に、将馬は未だ気づかない……………。

## 不審者と幼女

――西暦2021年。目覚ましい技術の発展と共に、地球が深刻な環境汚染に悩まされていた頃、“それ”は突如現れた。

“ガストレア”

ガストレアウイルスにより遺伝子を書き換えられた生物。鮮血の様に赤くなった目。強靱な肉体と強力な再生力を併せ持った巨躯。人間を捕食しながらそのウイルスで感染者を増やし、驚異的な速度で増殖していく。

世界中に出現したガストレアたちは、瞬く間に人類を侵略していった。人類側の決死の抵抗も虚しく、二度の大戦を経て世界と人口の多くはガストレアに奪われてしまった。

残された人類は僅かばかりの土地に逃げ、その周りを唯一ガストレアの再生力を阻害できる金属、“バラニウム”で囲うことによってなんとか生存を許されている。

だが、失った土地は膨大で、それは日本も例外は無く、国土を東京・大阪・札幌・仙台・博多の五つのエリアに分断された。

それから10年の月日が流れ――。

世界は元通りとはいかないまでも、ある程度の文明的な暮らしを取り戻しつつあった……。

――西暦2031年。

千寿夏世は戸惑っていた。彼女は10歳という年齢に反して突出していると言ってもいい、類い稀な頭脳を保持している。だが、そんな聡明な彼女を持つてして、今起こっている現象を表現できる言葉が出てこなかった。

いつも通り布を纏って床で横になって眠っていた彼女は、不思議な音に目を覚ました。液体の様な物が床に飛び散る音と、何かを激しく衝突させる音。

空間把握に長けている彼女はそれが自分の部屋の、洗面所から聞こえてくる音だとわかった。

（将監さん、今日はやけに早起きですね。いつもはもつと遅く起きてくるのに。）

寝起きがあまり良いとは言えない自分の相棒を思い浮かべながら、夏世はもぞもぞとくるまっていた布から身体を起こすと、それをきちんと畳み部屋の隅に置く。元々は物置部屋のため、自分が寝るスペース分くらいしか面積が無いが、部屋を与えられているだけマシだと夏世は思っている。

部屋を出て、とりあえず件の音がする洗面所にトコトコと歩いていく。と、そこで夏世は自分の知覚した情報に少くない違和感を覚える。

どうやら彼は蛇口から流れてくる水を手で掬い取った後、それを後ろに撒き散らしながら自分の顔を叩いているようなのだ。

（顔を洗って……いるわけではなさそうですね。水は殆ど床に落とされているみたいです。常々脳みその代わりに筋肉を詰めてしまっているんじゃないかと疑ってはいましたが……よもや冗談が信憑性を帯びてしまうなんて……）

わりと失礼なことを考えながら夏世は、日頃の将監の筋肉信仰つづりを思い返し、新しい筋力トレーニングの一環なのだろうか？と適当な理由を頭に浮かべる。

いくら考えたところでしょうがない。自分も顔を洗いたいし、話しかけると怒られそうなのであまり気は進まないが、一声かけて場所を

譲って貰おうとドアノブに手をかける。

ドアが半分ほど開き、その先に映る光景を目撃した夏世は、慌てて中に入ろうとしていた自分の身体を引っこめる。

そうして今度は、半開きになったドアの隙間から中の惨状を窺う。

そこには、手を蛇口から流れる水で清めながら、己の顔を平手で一心不乱に叩き続ける相棒<sup>プロモーター</sup>、伊熊将監の姿があった。

千寿夏世は戸惑っていた。脳が高速で稼働し、自らの目に映る景色を理解しようとするも、考えれば考えるほど困惑してしまい、思考がエンストしてしまう。かろうじて口から紡がれた言葉は「将監、さん……？」と彼の名を呟くだけである。

将監が取っている行動の真意を探ろうにも、意図がまるでわからない。

(まさか、感染した!?)

一連の行動は何かの昆虫の習性なのでは？一瞬最悪の事態が頭をよぎるが、すぐにそれを否定する。昨夜寝るまではいつも通りであったし、深夜から早朝にかけて襲われたのなら気がつくはずだ。ガストレアは基本的に巨体であり、隠密行動には向いていないのだ。

(感染しているわけではない……。ですが先程からの仕草には、一定のパターンがあります。手で水を掬い、それを後方に投げ、手の勢いはそのまま殺さずに顔面へ……。自身の顔を叩くことに注意が向きがちですが、本命は背後に溜まっている水？もしかして、下の階に住む住人の部屋の天井から雨漏りを狙って……) (……)

元相棒で現在は不審者へとジョブチェンジを果たした男を放置し、あれこれ思考を巡らせていた夏世はふと、顔を叩く音が止んでいることに気づく。ハツとして視線を洗面所に向けると、睨んでいるかの様な目つきの悪い双眸が、夏世の姿を捉えていた。

## 君の名は

洗う。洗う。洗う。ひたすら洗う。

顔の汚れでは無く、

恐怖を振り払う様に――

不安を取り除く様に――

将馬は手を動かし続ける。

何時までそうしていたのか。顔がヒリヒリと熱を帯び、手がジンジンと疼いているのを感じ、将馬はようやく現実逃避から帰還した。

(あれ? さっき見た時よりも顔が大きいような……? というか、何故こんなにも頬と手が痛いんだ? 冷水に手をつけると痛みを感じるけど、こんなに痛かったか? くそッ、何の為の筋肉だ! 筋肉質になると痛点も鍛えられたりしないのかよ。)

自分の隆起した筋肉にぶつぶつとイチャモンをつけながら、将馬は顔を上げ蛇口を捻り、水を止める。

顔を拭こうと思いタオルを手にしようとしたが、あれだけ(正確な時間は判らないが10分ぐらいは経っていきそうだ)洗顔したというのに、顔がほとんど濡れていない。

――わけがわからない。これ以上俺を混乱させないでくれッ!

と思ったがこちらの方は踵を返したら即解決した。

床が水浸しとまではいかないまでも、ビショビショに濡れていたのだ。

が、同時に何故顔を洗う水が自分の後ろの床に飛び散っているのかという新たな疑問が生まれるのだが、将馬は考えるのを止めた。

(ワンアクション起こす度にポンポンポン疑問を作るんじゃないやねえ! なんなんだこの家は!? こいつ、見た目のわりにインテリで主食は謎だったんじゃないだろうな? そう考えればこの筋肉もドーピングコンソメスープの恩恵っぽいな……。まさかッ! 俺は漫画の世界に入るのか!? ?ここはネウロワールドなのか!! ??)

疑問の大半の生産者は理不尽に憤り、当たらずとも遠からずな推理を展開する。己の妄想に「マジかよ…」などと言いながら、洗面所を

後にしようとしてドアに向き直ると、将馬はドアが半開きになっていることに気づく。疑問よりも先に視線を下へやると、所謂美少女という奴が、何やら考え事をしながら廊下に立っていた。いや、正確には美少女？だろうか。

落ちて着いた色の長袖のワンピースとスパッツ。色素の薄い髪色のショートヘアーに、ぱつちりとした目元。10歳前後のように思えるが、どこか冷めた雰囲気を感じているせいか、見た目よりも若干大人びて見える。

……どうやらこの謎ハウスには少女まで完備しているらしい。

その筋の紳士からは入居志願者が殺到してきそうだが、生憎と将馬は、正常な嗜好を好む健全な男児だ。

(家の中に少女が……。これは、もう流石に認めなくちゃいけないのかなあ。)

将馬は大きなため息を吐くと、目の前の少女を見つめながら考える。

(間取りは似てても俺が住んでいた場所とは別の家。腋が閉まらないほど発達した筋肉とチンピラみたいな顔の持ち主に。そして、俺の家に少女なんていなかった。どんな珍現象かわからんが、これらの状況から考察すると、だ。俺の魂というか精神というか、そんな非現実的な物質だけが、どこか別の場所の人物に乗り移った……。)

考えながら将馬は唸る。

(俺はこんなガキの空想のようなこと、本気で起こると思ってんのか？でもこんぐらいぶつ飛んだ展開じゃないと、今の状況の辻褄が合わないし……。大体、こんなある日突然成り代わるっておかしくないか？普通、神様っぽい奴が適当な理由で行なって、そのお詫びとして素敵能力をプレゼントしていき！って流れだろ?)

いるんなら自分、精一杯務めるんでもつかいチュートリアルからやり直してくれませんか？

心の中でのいるのかどうかわからない神とやらにコンタクトを取ろうと躍起になる将馬に、おずおずと声が掛けられる。

「あ、あの……。えっと、その……。おはよう、ございます、将監さん

……」

先程から廊下で立っていた幼女がこちらを探る様に、上目遣いで遠慮がちに挨拶をしてきた。

(将……なんだって？この子今、将なんとかさんって言ったよな……)

もしも、もしもだよ？将「馬」って言ってたとしたら、やはりどこかに連れられてた挙句、改造されてムチムチボディになったってことか!??)

将馬はもしかすると、精神だけが移ったなどという意味不明な現象ではなく現実的な手段(改造も十分非現実だが)で、今の環境に置かれていて可能性の出現に気分が高揚する。

(現実的な手段であればその対処法も存在するのが筋!!?落ち着け、落ち着くんぞ将馬。この千載一遇のチャンス逃すな！慎重にこの子に名前を聞き返すんだ！そう、恐れるな。たかが名前を聞き返すだけだ、クールにいけ！クールに!!?)

意を決し、名前を聞き返そうと眉間に力を込めた将馬の目に、目の前の彼女が、警戒心を強めた瞳でこちらを見ているのを捉える。

よく見れば、少し怯えている風でもあった。

(しまったッ!??逡巡している間が長過ぎて、不信感を持たれてる！いや、駄目だ落ち着け！狼狽してる場合じゃない。焦るな、ゆっくりと静かに素早く慌てずにこちらの用件を伝えるんだ！)

将馬は眉間に入れた力を増し、彼女に口を開こうとするもますます彼女の警戒心が強くなっていく。

実は、不自然な会話の間では無く、将馬が眉間に力を込める度に、睨み殺さんばかりの眼力が夏世に向けられているため、彼女は警戒しているのだ。

それを見た将馬が焦り、目に込めた力を増すので更に夏世は警戒を強めそれを見た将馬が……と悪循環しているのである。

(くそッ、何故だ!??なんで自分の名前を聞くだけでこんなに難易度が跳ね上がってるんだ！マズイ、マズイ、マズイマズイ!!?)

最早クールさのかけらもない形相で、将馬は必死で夏世との対話を成立させようとする。

(斯くなる上は！必要最小限の単語を並べてこちらの意向を伝えるしかない!!？言葉さえ話せば分かり合えるはずだ！こちらに悪意がないこともアピールしつつ会話を試みる、これだ！)

一刻の猶予もないと判断した将馬は乾いた唇を舌で湿らせ、即座に言葉を紡ぐ。その際両手を広げ、無害アピールも忘れない。

凶悪な人相で舌舐めずりをしながら、男は両手を広げこう言った。

「小娘……俺の名を言ってみろ。」  
もう滅茶苦茶だった。

ココハ、ドコ？ボクハ、テンプレ。

「それで？他にまともな申し開きはありませんか？将監さん。」

一人暮らしには持て余すであろう広いリビングルームのソファに、1組の男女がテーブルを隔て向かい合っている。実際は男女と呼ぶには些か女性が若過ぎるのだが、それはこの際置いておく。

男の方―将馬は、全く納得していないという声音と共に女性から発せられた言葉に、しどろもどろになりながらも口を開く。

「いや、その、確かに寝ぼけてたにしてはかなりはっちゃけてはいた自覚はあるけど。でも！少し間が悪いことが重なった故の事故みたいなもので決して他意があつたわけじゃ・・・」

「自分よりもかなり歳が下の女の子相手にジャギプレイを強行しておいて出てきた言い訳が寝ぼけてた・・・ですか。」

向かい合う男女の内の女性側―夏世は表情の乏しい顔に僅かな呆れを見せながら、尚も将馬をなじる。

「前々からマツスルイズムな所は多々見受けられましたがまさかその歳で世紀末世界に憧れを抱いていたとは思いませんでした。なんでですか？出来の良い弟を見つけては嫉妬してツンデレしちゃう特殊な性癖でも持ってたんですか？だいたい、将監さんは―」

そんな趣味持ってたまるか!!あと、あれをツンデレ認定するな!ツンデレ好きに謝れ!

そう叫びたかったが、おそらく抗議をしても無駄だろうと判断した将馬は、大人しくイジられていた。この幼女、いやに弁がたつのである。まさか口喧嘩で幼女相手に負けるとは思わなかった。

なぜ俺はいつの間にか入れ替わってしまった新しい肉体を手に、小さな女の子から言葉責めを受けているんだろう。

興が乗ってきたのか、未だ収まらない彼女の話をBGMに将馬はそ

もその原因でもある数分前の事を思い返す。

洗面所のドア越しに佇む小さな女の子が、自分の名前を口にしたらかもしれない。

少女がなんと叫んだかを探ねようとパニックに陥りながらも必死に口を動かした結果。

世紀末を闊歩し、義弟の名を騙り、悪逆を尽くす男の様な口調になつてしまった。

言い方に加え仕草も相まって（無害をアピールしようとしたのに、鏡に映る姿は紛う事なく犯罪者のそれだった。何故だ。）恫喝を迫る形になつていた。

元々警戒気味だった少女は、しかしその言葉を聞くと、『何を言ってるんですか？』と怪訝げに呟くと、先程まで纏っていた恐れや不安を霧散させていった。

一先ず警戒を解いてくれたことを確認したので、これ幸いとばかりに一気にまくし立てた。

自分は怪しい者じゃないので警戒しないでいいこと。

物凄く不機嫌な顔をしているがニュートラルがこれなので安心してほしいこと。

ただ自分の名前を聞き返したかったこと。

水を撒いていたのは洗顔してただけで特に意味は無いこと、など。

ついでに、高圧的な口調で質問してしまったことを当たり障りのない謝罪でフォローしておく。

彼女の方も釈然とはしていなさうだったが話が進まないのだからそれを口にするのはせず（ただ、名前は教えてもらえた。結局自分の名前ではなかったので希望は潰えたのだが）、俺が喋り終わるのを静かに聞いていた。

一通り言いたいことを言い終えた頃合いを見計らい、今度は向こう

から質問を投げかけてきた。

「どうして自分の名前を聞いてくるのか、と。」

これについては『俺の精神がこの男の身体に乗り移ってるかもしれないから、焦ってたんだ。』などと言っても信じてもらえないので、寝ぼけていたと言いついた。

苦しいのは承知していたが、大して良くもない頭で思考しても咄嗟にこれ以外の言い訳がでなかったのだ。当然この子がそれで納得するはずもなく、追及が続き今に至るといいうわけである。

「ーそもそも、日頃から将監さんは自分の筋肉を自慢したいという欲求が透けて見えていました。ええ、ええ。そうですとも。気づいていないとでも思っていたんですか？ 私は初めて会った時から……：将監さん？ 何ボーっとしてるんですか？ 現実から逃げないでください。貴方の特殊な嗜好については最早疑う余地はありませんがそれから目を背けるのはーーーー」

いつの間にか俺の奇行についての言及から自身の性癖とどう向き合っていくかを激励の句と共に述べる彼女を尻目に、既に悲鳴をあげつつある脳を更に酷使し、俺は一見知的に見せかけた微妙にポンコツなこの娘が納得するだけの理由を考える。

しかしそう簡単に妙案が浮かぶはずもなく、やっとの思いで新たに絞り出した理由は、既に手垢の付きまくっている、古今東西使い古されたベタな手だった。

（……記憶喪失だ！ 記憶喪失のふりをしよう。幸い、俺がこの男と入れ替わってるのは誰も知らないはず。ならこの男のふりじゃなく、素直に俺は俺として振る舞えばいい。こんな見た目な奴と普段の俺が似通ってる可能性もほぼ0と言つていい……。人格、口調、仕

草が全く違ければ、説得性も増す。」

人は姿形が似ていても、その人物を知っていればいるほど、他の所作が違うことに強烈な違和感を覚える。

「……これだ!!？」

(少なくとも同じ部屋に住んでたんだ。知り合い以上の関係であることは間違いない。ならば、必ず普段と違う行動に気づいてくれるはず！というか気づけ!)

依然苦しい言い訳には変わらないのだが、将馬としてもこの状況からいい加減進展したいので半ば無理矢理に会話に加わろうとする。

「あつ、あのさ!」

「……人の数だけ趣味嗜好があるものです。ですから自分の性をうけいれて……なんですか将監さん? 私の励ましに勇気を貰えたのなら……」

「いや違えよ! いい加減性癖の話題から離れろ! 何がお前をそこまで熱く語らせるんだ! ……つてそうじゃなくて!」

長々と続いていた無駄話を強引に中断させると、軽く咳払いをし、将馬は空気を切り替える。暗に今から真面目な話をするぞ、と分かりやすい意思表示のつもりだ。

「実はな、本当は寝ぼけてたわけじゃないんだ。ただ、俺自身困惑してさ。俺の理解が追いつかないまま君に話すのもどうかと思つて……」

「何を言うかと思えば。将監さんがよく理解しないまま会話してくるのなんて、今さらじゃないですか。そんな急に気を遣われても。」

「シリアスモードなのに馬鹿にされたッ!」

前フリの段階で横槍を入れられた将馬は、速攻で目的を忘れツッコミに精を出そうとするが、夏世によって軌道を修正され(そもそもが

会話を脱線させたのは夏世なのだが）話題を戻される。

「ですから、余計な心配は無用なので手短に言いたいことを伝えてください。今日は急な依頼がきているので、あまり時間はかけられませんがよ？」

「自分から厄介にしてたくせに・・・ま、まあいいさ。俺の方が？歳上だし？ここは大人の対応をしておこうじゃないか。」

やられっ放しは癪なので、（本人的には）余裕を持った大人の対応で、器の大きさを示しておく。

「さつきも言ったけど、俺もよくわかってはいないし、上手くは説明できなんだけど・・・。実は俺、記憶喪失みたいなんだ。」

ようやく本題に入れた将馬は先程の夏世の会話のキャッチボール罵倒を思いだす。

（もう会話がスムーズに進むのは諦めた。まずはここで

夏世スッ娘ロリが弄りに格好の材料を得たことで、暫くは嬉々として俺を「なるほど。これまでの言動を鑑みれば、確かに記憶喪失というのが一番妥当なようですね。」

「・・・えっ？」

向こうが納得するまでどれぐらい時間がかかるかを懸念していた将馬は、今までとは打って変わって状況を受け入れた夏世に困惑した声をあげる。

「どうかしましたか？」

夏世が小首を傾げながらそう尋ねてくる。

「ああいや、だって今まで散々ゴネてたからそんなに急に納得してくれるとは思わなくて。」

「ゴネてなんかいません。将監さんが回りくどいことを言ってお茶を濁すので、少しばかり仕返しをただけです。」

「ほぼここまでの間、丸々1人でしゃべり続けていたのを少しばかりとぬかすのか・・・。いや、ていうかだからって、いきなり記憶喪失ですって言われてなんでそんなに素直に受け止められるんだ？」

そう問うと、平坦な表情に少しだけ眉根を寄せて夏世は答える。

「なんですか。まるで疑って欲しいみたいな言い方ですね。それとも

記憶喪失というのもその場しのぎでまだ何か隠しているんですか？」

……鋭い。

思わず呻きそうになった自分の口を辛うじて閉じる。魂本当のことの乗り移りを告げられないので記憶喪失にしようとしているのに、相手があまりに素直に受け入れられたのでこっちが慌ててしまった。

考えてみればこの状況は概ね自分が望んでいた通りの展開なのだ。ならば下手に詮索はせず、このまま流れに乗るのが得策だろう。

「い、いや、そんなことはないよ！ただ、納得してもらえるかわからなかったから、肩透かしを食らって驚いただけなんだ。」

「まあ、いきなり記憶喪失だと喚く筋肉体質の強面さんが現れたら、誰だってまず詐欺か何かの罠を思い浮かべるでしょうからね。」

「なあ。もしかして君、他人を罵倒しないと会話ができない病気とかじゃないよね？」

割と本気でそう尋ねれば

「失礼ですね、他人をここまで侮辱するなんて。『名は体を表す』という諺がありますが、どうやら『悪人面は態度あくにんずらに現る』という類語もあるようですね。」

とても小気味の良い罵お返事りが返ってきた。

「言つとくけど、勝手な造語まで作り上げて罵倒してくる奴のセリフじゃないからね？それ。」

「話しかけないでください。児童虐待で訴えますよ？」

「やだ……理不尽……。」

性懲りも無く舌戦を仕掛けるも秒で迎撃された学習能力のない将監を、ジツと見つめながら夏世は口を開く。

「それで、先程の質問に対する答えですが将監さんの記憶喪失を簡単に受け入れたのは、同じく簡単な理由です。まず将監さんは私のことをキミなんて知的な呼び方はしませんでした。基本的に名前かお前やオイ、と呼びます。」

(キミ呼びをしてくるだけでこの男は知的扱いされてるのか・・・)  
コイツ本当に脳筋一族だったんだなあ、と将馬は呆れつつも自分の狙い通りに違和感を感じ取られたことに内心喜びながら、夏世の声に耳を傾ける。

「もう一つは本来の将監さんであるならばそもそもこんな会話成立しないからです。」

それを聞き将馬は一瞬なんで？と疑問を浮かべたが、どこか思い当たったのかああ、と納得の声をあげる。

「たしかにこんな見た目してる奴が、大人しく君みたいなお子どもに言いたい放題言われたままなんてないだろうしなあ。」

「それもありませんが、元々将監さんは私と接する時は必要最低限のコミニケーション話しかしませんでしたから。」

それに、と夏世は続ける。

「同じ部屋に住んでいても、こうして一緒に向かい合ってソファアームに座ることなんかもありませんでしたし。」

どうやら将監という男は普段悪ぶっていても誰も見ていない所で雨に濡れた捨てネコを拾うギャップなどは持ち合わせておらず、容姿通りの性格だったらしい。

それよりも将馬は、本来の将監と自分との関係を語っている夏世のことが気になった。

感情の起伏が薄く、表情も乏しい彼女は自身の扱いについても淡々と受入れているかのように話していたが、その表情は少し寂しさを湛えているように将馬には見えた。

そんな彼女の姿がひどく儂げに感じ、咄嗟に言葉をかけようもするも甲高い電子音がそれを遮る。

突然鳴り響いた音の所在に2人は(将馬はビクリとしながら)目を向けると、部屋に備え付けられたインターホンがチカチカと点滅しながらこちらを呼んでいた。

夏世は時計を確認すると、ソファアから立ち上がり受話器を取る。外にいる人物と一言二言会話した後受話器を元の場所に収め、こちらを向いた。

「将監さん、迎えの方が下に着いたようです。とりあえず話の続きは車の中でしましょう。」

「なんの用事かもわかってないんだけど俺も付いていくの？ていうか迎え？えっ、俺ってもしかしてお金持ちなの!？」

「まあ、お金に不自由は無いと思いますよ。それとあまり時間はありませんので、とにかく付いて来てください。必要な武器は私が用意しておきます。」

そう言い残しながら夏世はリビングを後にする。

ソファアにぽつんと座り込む将馬はどうにかややこしい事態を一応はやり過ごしたことに安堵していた。

（どうなることかと思ったけど、当面の課題は乗り切ったんだし上出来かな。俺の身体に戻る方法についてはまるで手掛かりが無いんだし、慌てても仕方ない。おいおい少しづつ探していこう。）

（それにしても、下で車が迎えにくるような場所に行くんだからてっきり高級飲食店でも行くのかと思ってたけど……。夏世？ちゃんは何物を用意するって言ってたし……。もしかして親戚の人たちと集まってハイキングとか？）

ふと将馬は今の自分の格好を思い出す。

ズボンはまだしも上は黒のタンクトップ一枚のみ。腕には刺青のオマケ付き。

（山にいくのにこれは流石に軽装過ぎだ。親戚なら周知かもしれないけど、公共のマナーがあるから刺青も隠さなきゃだし、俺も上着とつてくるか。）

ズレた思考のままソファアから立ち上がりクローゼットらしき物を探しに（将監の自室はベッドしか置いていなかったのでどこか別の場所にあるはずだ）部屋へ向かおうとしたところで、廊下へと続くドアが開き夏世が姿を現わす。

「将監さん、準備が整いましたよ。さあ、下に降りましょう。」

「あつ、ちよつと待つてくれるかな？上着を取りに行くだけだからすぐ済むしよ。」

「そうですね。それじゃあ私は荷物を持って先に降りてますから。ロビーの目の前に駐車してある黒い車に来てくださいね。」

了解の意を示し部屋に向かう将馬に、玄関から「ああ、それから」と夏世の声がかかる。

「多少荒療治になってしまいますが記憶喪失にはショック療法は効き目が期待できそうなので、記憶が戻るといいですね。」

相変わらずの無表情でそう告げると夏世は外に出ていってしまう。

「……………え？」

不穏なセリフを残した夏世に思わず聞き返そうとするもそこに既に彼女の姿はない。

決して暑さで発汗したのではない汗が将馬の頬を伝う。

「……………え？」

## 幕間①

そこかしこに乱雑して建てられた高層ビル群のその一角、屋上で一人佇む男がいた。

時刻は深夜。辺りはもちろん道路にも人影は無く、男の周囲を照らすのは月明りのみ。不審感を抱くには十分な光シチュエーション 景だが、男の格好が更にそれを加速させる。

人としての厚みが明らかに足りていない細い胴体に手足。百九十を上回りそうな身長と、細い縦縞の入ったワインレッドの燕尾服がより一層男を細身に見せていた。そして、ただでさえ今いる場所に不釣り合いな服装に、トドメと言わんばかりに舞踏会用の仮面マスクで顔を隠している。

全身で怪しさを表現している男は、約束の時間になっても待ち人が現れないことにやれやれとため息を吐くと携帯電話を取り出す。コールすること数秒、電話が繋がると同時に男は言葉を投げかける。

「小比奈、何をしている。もう集合時間は過ぎているよ」  
「でもパパ、まだ探し物が見つかってないよ？」

通話相手の返答を受け男は浮かんだ疑問をそのまま口にした。

「それは目的の物が見つからないのかい？もしくは標的ターゲット自体を見失ったのかな？」

それに対してはただ一言うん、と否定の返事を返される。こちらからは見えないのに、通話の向こうでは頭を横に振りながら答えているのが男は容易に想像できた。

「パパの言った場所に向かったら、ガストレアはちゃんといたよ。だから首を斬った後にケースを探してるんだけど、見つからないの」  
通話から時折混じる何かをぐちゃぐちゃと物色するような音から察するに、どうやら絶賛搜索中の様だ。しかし小比奈のことをよく知っている男は小比奈とは違う結論に達していた。

「いいかい、愚かな娘よ。そのガストレアはハズレだ。おそらく前回遭遇した感染者の一人だろう」

「そうなの？」

「ああ。小比奈、ガストレアを始末した後どうやってケースを探していた？」

「えっと……たくさん斬って、細かくして、身体の中に無いかなって」  
「まだよく理解できていないという風な小比奈の口調に、男は言葉を続ける。」

「アレはそこそこの大ききがある。小比奈が時間に遅れるまで切り刻んでいたならば、ガストレアの肉体はバラバラになっているだろう。違うかい？」

「そこまで言っただけでようやく理解したのか、小比奈はあつと呟きを漏らす。」

「そういうことだ。そこまで細切れにしたのにも関わらず、ケースが姿を見せないならば答えは明白。そいつは初めからケースを所持してはいなかった」

「元々その可能性を考慮していた男に落胆の色は少なく、既に次の潜伏場所の特定を要請していた。」

「そいつがハズレなら仕方ない。小比奈、かくれんぼは続行だ。引き続き二手に分かれよう。場所の指定は追って連絡がくるはずだ」

「うん！わかった」  
「普段に比べ、ややテンションの高い小比奈に先の事を思い出し、釘をさす。」

「言っておくが愚かな娘よ。今度は斬ることに夢中になり過ぎて時間に遅れたり報告を怠ったりしたら暫く斬るのは禁止にする。いいね？」

「うう……パパア」

「駄々をこねる時の様な声を出す小比奈との通話を終え、男は月明りを飛び出し、暗闇の街に溶け込んでいった。」